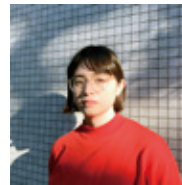


作家名

齋藤 英理



作家詳細

タイトル

## 見えないものを想像する

映像作品（15分）

コメント

相手の気持ちを想像して、誰かを思いやることは社会生活でとても大切です。相手の思い描いている色、形、大きさ、距離などの視覚情報が自分のイメージと異なるということは当然であり、相手に寄りそってそれらを想像することは、人を思いやることにもつながると思います。今回児童が作った作品は実際に手を動かした本人は目隠しをして見えていない状態なので、見えない物事への模索とも言えるでしょう。そして、作品制作のヒントとなる説明役の言葉に耳を傾けることはできたのでしょうか。

作品を制作した児童はどんなお題で、自分がどんなものを作ったのかわからない状態で、この展示室にやってきます。ペアの相手につけてもらったタイトルは作品を探す手がかりになるのでしょうか。手の記憶というのはどのくらいの期間持続することができるのでしょうか。美術や作品制作には正解というものはないので、その不明確な何かを一緒に探し合えたら面白いのではないかと思います。ワークショップ参加児童、そして鑑賞者にとって、視覚以外の表現の重要性について再認識できる機会となれば幸いです。

撮影：池添 俊

協力：木更津第一小学校のみなさん、ボランティアスタッフのみなさん

### 出前ワークショップ

学校名

木更津第一小学校 6年生 62名

タイトル

## 見ないで作る、手探りの表現

目隠しをして制作した粘土作品

コメント

見える状態の説明役と見えない状態の制作役のペアで行う、粘土を使った作品制作のワークショップを行いました。説明役にはNGワードを設けたお題の紙を配り、使って良い言葉に制限がある中で相手とコミュニケーションをとる必要があります。制作役は説明役から聞いたイメージをもとに粘土で造形しますが、完成後も展示会場に来るまでは作品を見ることはできません。30分の制作の後、説明役が相手の作った作品にタイトルをつけ、役を交換します。タイトルは制作した本人と説明役だけが知るもので、制作役の児童にとって自分の作った作品を展示会場で探す手がかりとなります。

作品をよく見ると何かしらの具体的なイメージがあり、説明役のヒントからお題を読み取ってなんとか形にしようとした痕跡を見ることができます。目をつぶって作ったとは思えない造形的な作品や今ひとつどんな状態が分からないが相手とのやりとりを感じられる作品など、それぞれが時間内に工夫して制作をしました。お互いのコミュニケーションの綿密さと見えない中での空間把握能力によって、これらの表現には違いが出たかと思えます。誰がどの作品を制作したのか、また、どのようなお題が出題されたのかは、鑑賞者に知る術はありませんが、手の痕跡、またはやりとりのプロセスを想像する鑑賞体験ができると思います。



ご協力いただいた学校関係者・ボランティアサポーターの方々、心からお礼申し上げます。  
木更津みなとぐちアートプロジェクト2022 ミナート スタッフ一同

ミンナとアート  
みなとぐち

art-kisarazu.jp